

浦坂純子著『あなたのキャリアのつくり方 NPOを手がかりに』ちくまプリマー新書 (2017年)

現在、政府によって進められている「働き方改革」のなかでは、成長と分配の好循環を実現するために、多様な働き方をめぐる議論が展開されてきた。ただし、このなかで議論されてきた“多様な働き方”とは、企業における働き方を主眼においたものである。著者である浦坂氏は、このような「働き方改革」の枠を超え、NPOなど企業以外の場での仕事を含めたキャリア形成について考えていくことの必要性と可能性について提起をしている。

なお、ちくまプリマー新書は、主として若者を読者層としたシリーズとして出版されている。しかし、本書に関しては、「キャリアのスタートラインに立つ若者だけでなく、『この道しかない』を捨てきれずにいる私を含めた現役世代の皆さんや、間もなくファーストキャリアを終えようとしている人生の先輩方を含め」、幅広い年齢層の読者を想定した内容となっている。

本書の冒頭にあたる「はじめに 普通に働く、が難しい」、「第1章 多様化する就業とキャリア」では、『普通に働く』がもはや『普通』ではなくなった」という現実を直視して、個々人がキャリアを検討することの必要性が説明されている。『社会』の変化があまりにも目まぐるしいなかで、「日本型雇用システムが、今やかなりの機能不全」に陥っていること、また、そのなかで企業は「本音のところでは求める人材は（中略）『フルで働き続けられるグローバル人材』で」あるが、「その割にはそういう人材を育て上げる力も、そういう働きに見合った処遇をする力も、企業は失いつつあります」とみている。現在の企業、そして雇用は行き詰まりの状況にあり、そのなかで「NPOという一つの事例」が「何らかの突破口」となりうるという現状認識が示されている。

続く、「第2章 NPOという道もある?」、「第3章 <若者>キャリアの選択肢としてのNPO」、「第4章 <女性・男性>ワークライフバランスとNPO」、「第5章 <高齢者>セカンドキャリアとNPO」では、著者が突破口と考えるNPOについて、既存のアンケート調査の結果、そして、著者の事例調査の結果にもとづきながら、企業と比べたNPOで働くことの利点、そして、課題についてまとめられている。利点としては、「NPOの最大の強みは、企業よりも一層多様な『働き方』が許容されている点」、「社会とのかかわりを実感できる点」があげられている。なかでも前者の多様な働き方が許容される点は、社会のなかで幅広い働き方、そしてキャリアを実現させることができる側面として、積極的に評価されている。一方、課題として指摘されていることが労働条件である。既存調査によれば、「NPO法人における正規職員の年収は、この10年間で着実に上昇し（中略）同じような規模の企業で働く人と、ほぼ遜色のない水準にまで到達している」という（賃金センサスの10~99人規模と比較されている）。しかし、不確実性のために「NPOで活動する男性の『寿退社』」が存在することも現状となっている。

ただし、これらの課題があったとしても、著者は、「特に比較的若年層が、新しい感覚を携えて参入し始めていること」、キャリアの選択肢としてNPOが『あり』と判断している人は結構いる、というところまで現実はずでに進んでいます」と現状をみている。

著者はNPOで働くというキャリアについて、何の憂いもなく、推奨しているわけでもない。学生からNPOで働くことを相談された場合にも、「何の屈託もなく『がんばって』と言えるかどうか、正直分かりません」とも書いている。しかし、1つの企業のなかで40年以上にわたり働き続けることが確実とはいえなくなっている雇用をめぐる現状、一方で、NPOで働く人びとの実像が変化してきたという調査に依拠した著者の実感にもとづけば、NPOで働くということをキャリア形成のなかに位置づけて考えることは現実的な考え方であり、かつ積極的な意義があることは間違いないだろう。

(小熊 信)